

おさなここち(幼心地) その八

魚の群れ

南出喜久治

平成22年10月24日記す

皆さんは、水族館に行ったことがありますか。

私も子供のころに、どこかの小さな水族館に行った記憶があるのですが、それから、ずいぶん長い間、水族館に行ったことがありませんでした。ところが、数ヶ月前、子供が孫を連れてきましたので、その孫と一緒に私たち夫婦と子供とで大阪の「海遊館」という水族館に行きました。本当に水族館は久しぶりでした。

海遊館に行くと、大きな大きなびっくりするような水槽の中に、ジンベイザメが泳いでいましたし、それ以外にも大きな魚と小さな魚が、いっしょに泳いでいました。

普通、水族館には、魚や貝などだけではなく、イルカなどがあるところもあります。イルカ、アシカ、アザラシなど水の中で生活する動物のいる水族館もありますし、動物園にもそれがあるところがあります。動物園というのは、福沢諭吉という人が名付けた名前ですが、歴史的には、動物園から水族館が別れてでき、それに植物園も作られて、いまでは博物館法という法律で区別されています。

しかし、ここでは、海遊館に行ったことをきっかけとして、一般的に、海や淡水(真水)の中に棲む魚の生態について少し話をしてみます。

久しぶりに水族館を訪れて、その大きな水槽の中を見て改めて気づいたことは、いろんな小さな魚がそれぞれ整然と群れをなして泳いでいることでした。

陸地の動物にも、群れをなして生活しているものが多いのですが、それは、親子の家族や、その家族がいくつか集まって群れを作っています。ところが、水族館の魚は、家族単位ではなく、家族を飛び越えて、まさにマスゲームのように同じ魚が一つの集団として動きます。見事であり感動的な光景でした。しかも、何かの音や光、それに何らかの気配を感じたら、一斉に方向を変えたりして、その群れ自体が一つの生き物のように感じます。

陸上でも、群れで行動するのは、蟻とか蜂もそうですが、これら一つの大家族（部族、種族）として群れをなしているのです。淡水（真水）に棲む魚でも群れをなして生きていますが、これと同じこととです。

このように、群れとしてまとまって行動をするためには、群れが方向を変える場合には、一斉にそれができなければなりません。そのため、すべての魚の胴体の側面には、「側線器官」という精密なセンサーがあり、これによって、わずかな水の動きや振動、波動を瞬間的に感じることで、それでほぼ一斉に方向を変えることができるのです。これが本能として備わったすばらしい能力の一つなのです。

では、そもそも、どうして、群れを作って行動するのでしょうか。それは、結論を言えば、種族保存のためです。外敵から種族を守ろうとする本能です。イワシなどの小さな魚は、ある程度大きな群れをなさないと種族が保存できないからです。群れをなしていると、餌として狙ってくる大きな魚やクジラなどに発見されやすいので、かえって危険ではないかとの疑問もあります。しかし、クジラの胃袋といえども、イワシの大量をいっぺんに全部食べてしまうことはできません。余りにも広い海に、イワシが一匹づつバラバラに散らばって、まんべんなく泳いでいたとすると、個々のイワシが外敵に出会う確率は非常に高くなり、全滅する可能性があります。多くのクジラや大型の魚が、トロール漁法のように、口をあけたまま回遊すれば、

際限なくイワシはその口に吸い込まれてイワシは絶滅します。しかし、イワシがいくつかの大きな群れをなして移動していると、一匹づつバラバラのときよりも、外敵に出会う確率は少なくなり、襲われなくても全滅を防ぐことができるのです。

「こんな生活の知恵は、決して「イワシの学校」があつて、そこでイワシの子供をイワシの親や先生が教えたことによつてできたものではありません。「ものごころ」がついて理性的な分別をしたためにイワシが集団行動をしているのではないのです。これは、生まれたときにすでに備わっている能力なのです。イワシには、理性がなく、「イワシの学校」もありません。このことは淡水（真水）の中で棲む魚でも同じです。ですから、「メダカの学校」もウソです。「だれが生徒か先生か」解らないのではなく、学校それ自体がないのです。

群れをなさずに、「一匹ずつ自由に暮らす権利がある」とか、「一匹づつイワシ権（人権？）がある」などという「個人主義」は完全に否定されるのです。それを実践することは死に直結します。本能が劣化したものや本能が弱いものが、群れから離れるのです。これは他の動物についても同じです。ですから、個人主義というのは、本能を否定してあえて自滅の道を進む死のささやきなのです。

そして、これは決定的なことですが、イワシが一匹づつバラバラに泳いで生活していると、危険も多い上に、オスとメスとが出会う確率も減り、仮に、出会つて卵ができて、その卵を外敵から守ることもできません。子孫を残すことが難しいので絶滅する危険があるのです。だから群れるのです。「子供を作らない権利がある」などという個人主義は、ここでは全く通用しません。

つまり、群れをなすことによつて、多くのイワシのオスとメスとが集まることになり、まとまって効率的に多くの子孫を残すことができるのです。ですから、群れの中心にいるのは、産卵するメスの

大群です。産卵期になると、メスの群れを全体の群れの中心にして、オスの群れは、それを外側から取り巻いてメスの大群を守ります。外敵が来れば、オスが命がけで、自分を犠牲にしてまで卵を持つメスの群れを守るのです。

しかし、外敵の餌食になったり、外敵に立ち向かうイワシのオスだって、本当は自分の命が惜しいはずで、自己保存本能があるからです。それでもイワシのオスはその身を犠牲にしてまで、イワシのメスと卵を守るのです。イワシは、漢字で「鰯」と書いて、弱い魚と思われがちですが、イワシの本能は、イワシを強くするのです。それは、これまでも話をしましたとおり、自己保存本能よりも、種族保存本能の方が高く、強い本能だからです。自己の命と体を守ろうとする当然ともいえるべき「欲望」を抑えてまで、種族全体を守ろうとする「欲望」のために行動するのです。つまり、「個体の欲望」を抑える「集団の欲望」が本能の序列において優先するということです。であり、「欲望」を抑える「本能」があるということです。ですから、「欲望≡本能」ではないことが解ります。

皆さんも機会があれば水族館に行つて、男と女は親となつて自分を犠牲にしても子供を守り、男は子供を産む女を命がけで守るといふ本能を強くする「自習」を試してみてください。